

白 金 簀



門田二篁 門田篁玉、門田祐一 三人展より（別府市竹細工伝統産業会館）



盛籃「瑞花」 本田青海作 72 回伝統工芸品展

身に入むやとくに人より犬愛す  
十月の白磁の皿の冷たけれ  
秋暑し何でもありの百円屋  
豹柄の背ナ見えかくれ花芒

璃子	（	穴まどひ平	21）	高志選
〃	（	〃	）	〃
〃	（	〃	）	みち選
〃	（	〃	）	〃

令和 7 年（2025）

9 月号

1 6 7 号

定例会（10月の兼題…菊、身に入む）

十月十七日（金）締め…通信句会

十一月二十一日（金）アビスタ第五学習室 12～15

十二月十九日（金）アビスタ第三会議室 12～15

九月句会（'25 9～19 兼題 名月、蓼の花）太字は当日句

光成高志

蓼の花穂に小さき花開く

みちのくの南部風鈴昼寝会

パトカーについて行きたる防災日

原爆忌どす赤き畝紫蘇畑

車押す顔挙を挙げれば盆の月

粃殻のビニール袋三段積

光みち

盆の月八百世帯町静か

ひと雨に色濃くなりぬ蓼の花

落雷か停電のまゝ三時間

踏切の上空走る稲光

落ちそうで落ちぬ榎櫓かりんの頭の真上

秋彼岸はけの水場に人たむろ

浅野正美

朝風や光の帯が一直線

蝉の声一山一氣に沸き上がる

蓼の花粒状の花密集す

名月や差し込む光部屋の中

草刈りは一人で始む刈りきらぬ

西の空皆既月食赤い月

佐々木由紀子

大空にぼっかり浮かぶ丸い月

蓼の花吹く風やさし少し揺れ

鶏頭も色とりどりに競つて

名月やお月様はまんまるい

大空をこうこう照らすお月様

沼の水小鳥飛び交ふ夏の朝

山下寿幸

稲穂先筑波の嶺が見えてをり

菊挿して日陰に並べ花を待つ

竹林の麓に咲いて蓼の花

街路樹の月に照らさる影を踏む

岩肌に秋桜コスモス咲いて人愛でる

曇空手賀沼通稲穂かな

山尾万世遊

過疎の村見下ろす名月運動会

蓼の花揺れ定まらず地裁前

野地の風身の太くあり蓼の花

名月を捕まえそこね蜘蛛の糸

鉢植えの大きく育ち蓼の花

167号選句一覽 ○字は選者の頭文字。 富特選

正蓼の花穂に小さき花開く

田盆の月八百世帯町静か

田朝風や光の帯が一直線

寿富大空にぽっかり浮かぶ丸い月

稲穂先筑波の嶺が霞みけり

寿富過疎の昼見下ろす名月運動会

田田穀のビニール袋三段積

田田田田田みちのくの南部風鈴昼寝会

田田富ひと雨に色濃くなりぬ蓼の花

田田田富蟬の声一山一氣に沸き上がる

田田田正蓼の花吹く風やさし少し揺れ

菊挿して日陰に並べ秋を待つ

田蓼の花揺れ定まらず地裁前

曇空手賀沼通稲穂かな

パトカーについて行きたる防災日

落雷か停電のまゝ三時間

田田富蓼の花粒状の花密集す

鶏頭も色とりどりに競つてる

竹林の麓に咲いて蓼の花

野地の風身の太くあり蓼の花

沼の水小鳥飛び交ふ夏の

原爆忌どす赤き畝紫蘇畑

踏切の上空走る稲光

田田田田田名月や差し込む光部屋の中

名月やお月様はまんまるい

田田田田田富街並み木月に照らされる影を踏む

寿名月を捕まえそこね蜘蛛の糸

秋彼岸はけの水場に人たむろ

田田田田田車押す顔を挙げれば盆の月

正寿落ちそうで落ちぬ榎樞かりんの頭の真上

草刈りは一人で始む刈りきらぬ

大空をこうこう照らすお月様

田田富岩肌に秋桜咲いて人愛でる

鉢植えの斯くも大きく育ち蓼の花

西の空皆既月食赤い月

俳窓評論纂

\* 6. 原爆忌のこの日の広島平和式典をテレビで見た。

市長・子供たち・総理大臣・県知事・国連事務総長(代読)それぞれ立派な挨拶であった。グテーレスさんの過去を記憶せよという言葉が記憶に残った。最後に平和の歌が歌われた。私はだんだん泪ぐんできた。それを見た隣にゐるみちさんが私の足の裏をこちよこちよと搔いて茶化した。歌の最後の その睦みここに歌わ

ん という言葉が気に入った。広島で六年間学生時代を過ごしたのは今になってよかったのだと思った。

\*朝日8.の24面は広島平和記念式典の記事。こども代表「平和への誓い」その下に市長の平和宣言、その下に首相あいさつ、知事のあいさつが並んで全文が掲載された。どれもこれも立派な挨拶と思えた。毎年のことながら、今まではうちやっていたが、今年は全部読んだ。テレビ報道も皆見た。こども代表のOne voice・首相の碑文「太き骨は先生ならむそのそばに小さきあたまの骨あつまれり」の朗読、知事の「国破れて山河あり」「国守りて山河なし」のあいさつ文に感動した。理屈ではなく生の声は現実感があつて韻文（詩）の力をいまさらのように思った。

\*10は長崎忌の記事。戦後80年原爆 キリスト教はどう向き合つたかの見出し。浦上の被曝は「神の摂理」永井隆博士の言葉 復興への力になった の横文字見出し。その下、「戦争は人間のしわざです」ヨハネ・パウロ2世のスピーチ 大きな転機。その下、「核兵器所有 平和への望みを試練にさらす」フランシスコ教皇。左にカトリック教会の動きが年表で示されている。NPTが核不拡散条約、核兵器禁止条約は国際条約として発効し、現在62の国と地域が批准（国家間に条約を承認すること）している。日本はNPTは批准しているが、核兵器禁止条約は批准していない。皆

が望んでいるのにアメリカに遠慮して動けない。私は二〇〇三年に生協の長崎忌出席の仲間になって長崎にお参りした。その時案内の男の方が長崎市民は神の罰として原爆を受けたというので私は黙って聞いたが、そんなことはない。

アメリカが原爆を落としたからではないかと心で反問したのを覚えていた。ヨハネ・パウロ2世が人間のしわざとスピーチしたのは一九八一年。二〇年以上経つても自虐的気持ちが残っていたのだ。私に慕ってきた平山君は酒を飲むと何時も長崎の鐘を歌った。歌としてはいい歌であるが、私は歌詞がいまだに気に入らない。その辺のいきさつは浦上の原爆の語り 永井隆からローマ教皇への著書がある市立大四條知恵さんの記事に書いてある。死んだことの意味を穿鑿するより生きる意味を考える方が余程いいもの。

\*同8.13のインタビュアー歴史をいかに物語る の見出しにて作家奥泉光さんが問いに答えるかたちのインタビュアー。新しい戦前という言葉がいまや強いリアリティーを持ち始めている。長い『戦後』の継続こそ、国民の意思でした。その下で私たちは紛れもなく平和と安定を享受してきた。しかし今度こそ戦後体制を清算すべき時を迎えています。このままでは次の戦争を阻止することはできない、と思うからです。日本だけが戦後〇年の言い回しを続けられたのは、先の大戦に私たちが向き合つてこなかった端的な証左

です。米国の意向で天皇が免罪され、西側の国々が賠償請求を放棄することで、日本は戦争責任を見つめる必要もなく国際社会に復帰し、経済成長に邁進できた。しかし今はどうでしょう。ロシアや中国米国までが自国中心主義に傾くなか、従来の国際秩序は崩れつつあります。日本は戦後『戦争をしなかった』というけれど、紛れもなく米国の戦争に間接的に参加してきた。そのことも含めて、戦後体制とその基盤となった戦後記憶の継承のあり方を問い直さなければ、昭和の『戦前』とは違う、戦争をしないための新たな『戦前』体制を構築することはできない。戦争記憶の継承に問題があったということ。経験化という戦争の失敗の本質―戦死者の大半は餓死や病死、誰もが戦争を始めた自覚がない無責任体制、銃後の民の体制協力、鬼畜米英とかがって敵意をあおった新聞・こういう体験が国民集団として反省的に共有すること、これを経験化という。何が経験化を妨げたかという点、明治国家は神話を引っ張り出しましたが、戦後日本は、尊い犠牲を礎にゼロから再出発し平和と民主主義を手にしたという建国神話が核になりました。これは国民国家を統合するには何らかの『物語』が必要だからです。戦後のこの建国神話では、戦争の元凶は軍部であり、民衆や天皇はどこまでもイノセントな存在になります。Innocent イノセントとは無実の、潔白なという意味

です。この物語はGHQと政府の合作ですが、定着に最も大きな役割を果たしたのは、受難の語りを主調とするメディアと小説をはじめとする文化芸術作品でした。例えば、戦後の『ビルマの豎琴』では戦争の主体である国家の姿と植民地支配の歴史は消去されている。戦友の弔いのため僧侶となり現地に残った主人公は、あくまで犠牲者であり、幻想としてのアジア的自然性と仏教的世界観に回帰する慰安とイノセンスに満ちた結末となっています。国民の側はなぜこうした物語を受容したのか？一つは加害者を忘却し犠牲者としての自画像に安住するのに好都合だったから。もう一つは、戦後の一國平和主義に適合的であったからだと思います。司馬遼太郎の『坂の上の雲』は、輝かしい明治と明るい戦後を接続し、両者に挟まれた『狂った戦前』を異形視します。まことに小さな国は一時版図を広げたものの、敗戦で再び小さな国に戻った。もう二度と戦争はまっぴらだ、という強い嫌悪感とともに。そして植民地支配された人々は戦後日本人の物語から消えてしまった。そうした歴史物語は、実証的な歴史学の知見で正されるのでしょうか？（中略）歴史と文学との近似性を歴史家と文学者が確認した。物語というのは人間の基本的な認識の枠組みです。私たちは物事を、因果関係などの物語構造で捉える。その多くが虚構です。家族の不幸が、先祖の悪行とか方位

に原因があるとされたりする。善悪・二元論も物語が抱える根本的な感覚です。それでも私たちは、物語なしでは現実を認識できない。ものを語るといふ行為そのものが、避けがたく物語を呼び込んでしまう。歴史叙述も、物語と無縁ではないのです。むしろ、歴史は客観的だという神話を解体することこそ重要です。客観性を期待できないなら、それぞれの歴史語りの質を上げていくしかないのか？（中略）硬直化した分かりやすい物語が持つ強力な作用を解毒する。単一の物語に世界を閉じ込めないこと。一色に染め上げる小説の方がはるかに多い。これは俗情との結託と批判できる。戦争として兵士個人と軍隊組織との関係を複層的に書く。戦争を敵・味方双方から複眼的に見ることは必要だが、さらに第三項、第四項がある。歴史に押し流された小さな声もある。それらを聴き再現するのは、小説家の大きな使命だと思えます。それが俗情と結託した物語の毒を解かすことになる。物語が劇薬です。文学は、政治や経済と違つて言葉以外に何ら裏打ちされるものがない。にもかかわらず人を突き動かしてしまう危険物です。実際に多くの文学者が戦時下、『満蒙は日本の生命線』『無敵皇軍』あるいは玉砕や特攻を美化する物語に加担してきました。今は戦争記憶の『歴史化』の潮目にあります。80年という時間の経過は、体験者による反証を物理的に不可能にしてしまう。都

合のよい史実のつまみ食いによる物語化がいつそうすすむ時代を迎え、それは映画や漫画、アニメという娯楽媒体に組み込まれることで伝搬力を増しています。「信じたい歴史しか信じない」という傾向が世界中で広がっているようです。ロシアのプーチン大統領は、ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性を強調し、イスラエルはホロコーストの受難を絶対的正義の根拠かのように扱っている。支配の正当性のため、あるいは国民を束ねるため国家は歴史を作り出す。それは権威主義国家にかぎりません。教科書検定もある意味そうですが、国家による『正史』つまり『正しい物語』の独占や、歴史語りの規制は極めて不健全で危うい。歴史は物語から逃れられない以上、結局はその並立に行きつくのです。それでも人々の記憶とその痕跡である記録を媒介にして、それぞれの物語に対して批評性と対話性を持つことで、歴史修正主義を退場させていくことはできるはず。もちろん時間と労力と根気が要る作業です。しかし、硬化した物語の力を解毒するには、繰り返し問いかけられるべき対話の『場』を粘り強く開放しつづける必要ならぬ。これは民主主義というシステムを維持することと同義のはずです。以上が奥泉光さんのインタビュー記事。

芭蕉の軽み以後（118）

光成高志

おくのほそ道の目的が松島を見ること、それに羽羽三山巡礼にあったとして、先に出羽三山の項を解説したのである。元に戻って芭蕉の歩いた所から私に引き付けて書き進めよう。左に行程地図を貼り付けた。別冊宝島<sup>2375</sup>入門松尾芭蕉(二〇一五)からスクヤンした。



地名の横に日付(旧暦)が書いてある。拡大鏡で見ると深川3.20発、千住3.27発となっている。この日付の穿鑿は五月号に既述した。この本では長谷川權が深川から千住まで多くの門弟たちが舟に同乗し師と別れを惜しんだと記されているが、これは事実ではない。と

曾良とともに、ひっそりと江戸を出て行ったというのが本当のようだとしている。先行研究者の説をばっさり切って捨てた説である。彼なりの根拠があるのであればそれを示しておくべきである。私は俳句に親しんでは偶田川縁の芭蕉記念館や芭蕉史跡や深川当りは何回も吟行したところであり、千住は鷗外の父の医院跡があるというのでこれも見て、千住大橋北詰の矢立の碑まで歩き、そこから引き返し、荒川土手下の名倉医院まで歩き、ついでに医院のことも触れた。みちさんと生活を始めた地が草加であったので、北千住は通勤の乗換駅であった。おくの細道の冒頭に出て来る千住も草加も親近感があった。曾良の日記には書かれていないが、草加の次は越谷、そして春日部(粕壁)。当地に共栄学園という大学を建てるというので敷地を見に行ったことがある。春日部から杉戸、幸手を経て栗橋まで国道四号線を約十キロ。利根川の南側、橋がないので関所があつて幕府の重要な関所として知られ、とくに、「入り鉄砲、出女」に厳しかったが、僧形の芭蕉、曾良は手形も断りもいらず関所を越えた。今はこの利根川橋を渡ると栃木県になる。その埼玉県側の橋畔に栗橋関所址の碑があり、裏面に文が刻まれている。見たわけではないが以前紹介した「関東の芭蕉」(阿部喜三男、高岡松雄<sup>S41</sup>)にその写し

を載せてある。分かりやすく書いてみると、徳川幕府慶長の末年（二一〇一四）栗橋町を開き渡船場を設け奥羽街道駅伝の用務を弁ず。次いで寛永元年（二六二四）関所を此の所に置き、爾来二百六十有余年交通を監す。明治二年（二八六九）諸道の関門と共に廃せられ大正十三年（一九二四）九月利根川橋竣功と同時に渡船場も亦廃止となる。大正十三年九月十四日利根川橋開通の日建之とある。西暦は私が入れた。栗橋に拘って橋と関所まで書いたのは、運転免許場が栗橋にあつて、ここまで来たことがあり、又たくやさんの通勤の驛であるご縁があるからである。又、仕事の事で皆を古河駅に集合と指示したのに雪のため上野に出る電車が遅れ、皆を1時間も待たせた記憶がよみがえったから。以上は蛇足。おくのほそ道の本文では草加といふ宿にたどりつきにけりのあとに、「瘦骨の肩にかゝれる物先ものさきくるしむ。只身すがらにと出立侍を、帟子かき一衣いちえは夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨・筆のたぐひ、あるはさがりがたきはなびなどしたるは、さすがに打捨てたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ」。芭蕉の文のなかに、多くの古典籍の余韻が含まれていて、それを一々読み取らねば、芭蕉が読んで共鳴した古典の息吹を理解できない。だから、その古典の仄めかしつまりアリュージョン（allusion）というが、それを

見つけ、なるほどと、手を打って納得する喜びを味わいたいのだ。理屈はさておき、右のカギ括弧中の原文を訳してみる。瘦骨の肩に載せた荷物がまず私を苦しめた。ただ体一つと出で立つたはずなのに、紙子一枚は夜の寒さを防ぐ、浴衣・雨具・墨筆のたぐい、或はまた否みがたい餞別の品など贈られたものは、さすがに打ち捨てがたくて、道中の煩いとなったのは仕方がないことだった。最後のわりなけれは已然形であり、意味は先に出羽三山にて櫻の花を見つけて「春を忘れぬ遅さくらの花の心わりなし」という使い方をしている「わりなし」である。ここではなんとも止むを得ないの意。自嘲とか愚痴を言っているのではなく、人生の矛盾の相を目の前に見て、やれやれお手上げだという自分を苦笑して見ているのだ。文芸という芸術と人生という生活との矛盾と言っている。芭蕉自身はみな達観しているのだが、文章に書くところなるのだ。紙子は洪紙製の防寒用衣服で夜の防ぎというのは当時の宿は寝具は箱枕一つ貸すだけで寝具は旅客が持参すべきものとされていた。だから旅の必携用具となっている。その他雨具・墨・筆の類（短冊など）、もらった餞別の品など捨てるわけにもいかなない旅のわずらいとなったのはしょうがないと書いている。芭蕉の旅は現代のような至れり尽くせりの旅行と違って、歩



いて歩いて場合によつては野宿も辞さない大袈裟にいうと命がけの旅であつた。そういう旅を繰り返して来て、このおくのほそ道という大いなる旅を歩いている。これまでの体力の消耗も積もっているだろうが、もう疲れたという言葉は残していい。これまでの芭蕉の旅を概略ふりかえってみると、29歳に江戸に下り31歳で帰郷（伊賀上野）33歳に二回目の帰郷、41歳に野ざらし紀行の旅に出て、郷に寄り、42歳で江戸に帰着、44歳の秋に鹿島詣の短い旅をこなし、すぐ笈の小文という伊勢、大阪、須磨・明石まで足を伸ばす大旅行の中に居り、45歳に更科を経て江戸に帰る更科紀行をこなし江戸に帰る。そして翌年の46歳の327にこの旅に出たのであつて、それまでに何回も体調悪化を経験している。芭蕉の書簡や句会の仲間たちの残した文から体調のことを（75）に書いたので再録はしないが、なにしろ荷物を背負つての徒歩の旅である。現在の我々の旅行とは全然違うのだ。41歳の野ざらし紀行ではより具体的に次の様に書いている。「旅の具多きは道ざはりなりと、物皆払ひ捨てたれども、夜の料にと紙衣かみこ、ちやひとつ、合羽かっぱ、やうの物、硯、筆、紙、菓等、昼筥ひるげ、なんど物に包みて、後に背負ひたれば、いとづね弱く力なき身の跡ざまにひかふるやうにて、道なほ進まず。たゞ物うき事のみ多し」。

この野ざらし紀行は愛弟子の杜国と乾坤無住同行二人と笠に書いて「そぞろにうき立つ心の花の」という華やいだ心をもつて出発したのに、たゞ物うき事という対照的な視線で書かれてあるのは、行く前は楽しい心が湧いて来て浮立つけけれど、実際歩いてみれば楽しいやあないぞということ、心と体のことである。心身はべつものという、もつと言えば文芸と生活、風雅というフイクション虚と生のリアリティ現実というジレンマ板挟みに陥っている言葉である。これは現代の我々の命題でもある。命題の意味もここで探ってみると、2は偶数である（正）。 $1+3=7$ （誤）。三角形の内角の和は180度である（正）。このような正誤を判定できる文章や式の事を命題という。数学ではこのように分かりやすいが、文章になると難しくなる。例えば、犬は動物である（真）。人間は卵を産む（偽）。植物は土から栄養を得る（真）。このように内容の真偽がすぐ判定できる命題ばかりではない。右の文芸と生活、もつと突き詰めていうと、虚と実、さらに突き詰める、心と身体、つまり精神と身体は別物であるという命題の真偽はどうか。真偽は別にしてそういう問いを命題というのである。（内緒で書くこの問題はベルグソンによつて真であることが証明された命題なのである）脱線気味の命題を書いたが、芭蕉の心を想像してみると、

やつぱり荷物は路次の煩となり物うき事のみ多かったのである。この歳の芭蕉は46歳であつたがもう翁と呼ばれていたのだ。年寄の敬称が翁であるから、無論尊敬されていたが。さて、おくのほそ道の本文はいきなり、室の八嶋に詣けいすとなつていて、曾良の曰くという文章が書かれている。先の長谷川權監修の地図では省略されている。既述の『関東の芭蕉』(昭和41)が一番くわしく書かれている。著者は二人同乗の車で芭蕉の足跡を追っかけて写真付書籍を出版された。そして、本文ではなく、曾良の随行日記に沿って書かれており、4.11の阿武隈川の端までを注釈され、最後のページに白河市借宿の忘れず山(現地山)の写真が掲載されている。私事であるが、大田原に居を構えた甥の案内で那須一泊旅行をした。「山も庭もうごき入るや夏座敷一の句碑がある浄法寺桃雪邸跡、遊行柳、温泉神社、殺生石を見て回った(H11一九九九)。この時の吟行録もいづれ紹介しようと思うが、その前に日光を略することはできない。次回室の八島、日光に触れたいと思う。

## 俳文広場

①今の暑さの中、庭でふうせんかずらが蔓を伸ばしうす緑色の風船の実を沢山付けて涼しげに風に揺れています。五月頃から蔓を伸ばしカエデの形のかわいい

葉を付けます。茎は細いが結構強く真つすぐに伸び脇芽に小さな小さな四弁の白い花を咲かせます。花の咲いた少し下に丸い形状の小さなヒゲが二本生えて隣りの蔓のヒゲとからみ合つてお互いにスクラムを組んだように支え合っています。支柱にもからまつてバランスを取り合い力強く伸びています。植物にも、無駄なものはなく、この丸ヒゲも己を生かすため、お互いを支えるため共存していく上での無くてはならぬもののようにです。花に実が付き丸いふくらみが少しずつ大きくなり蔓のあちこちでかずら<sup>葛</sup>がまさに風船のように揺れるのです。見るからに涼しげでホッと癒されます。花もひっそりと控え目でもこの猛暑にも負けず風船を生み続けます。七月、八月に入り早いものから茶色に熟してきて袋を開けると丸い種に白地のハートの模様がまるで判で押したようにくつきりと付いてその意外性に驚かされ厳しい状態の中で結実した種子は愛の結晶の美しい芸術作品のように思えてなりません。見惚れてしまいます。なんと素晴らしい生き様だろう！自分もこうありたい！一度きりの人生を大切に生きこのハート入りの種子のように最後には自分が納得の出来る心の達成感を味わいたい！毎年グリーンカーテンに仕立てて緑の棚をこんな思いで眺めているのを知ってか知らないでか　ふうせんかずらは今日も風

に揺れています。この酷暑まだぐ続きそうですね(廣本幸恵)。

②私は一週間に一度車で畑まで草取りと収穫、暑さに負けてお出かけ控えめです。主人は毎朝五時過ぎからウオーキング。畑に寄って野菜を収穫、汗びつしよりになって帰宅しています。ランチは朝取り野菜のオンパレード。ねばねばおかず(オクラ、モロヘイヤ、つるむらさき)毎日食べています。7.31の早朝いつも通り畑へ小玉西瓜5個あったのに一個もない。ハクビシンに食べられて皮と真つ赤な実が散らばっていたそうです。大切に育て楽しみにしていたのにショックが大きかったです。酷暑の夏、人も動物も同じ。寄り添いながらのりきっていくしかないですね(藤田朋子)。

③飛鳥路を自転車で巡り、飛鳥坐神社から飛鳥駅を目指してペダルを漕いでいる。初めて見て廻った古墳や御陵などの史跡より私は飛鳥の山河に魅かれた。ノスタルジアに駆られた。高校生まで過ごした故郷にいる錯覚に襲われた。故郷の井伏鱒二や木下夕爾が飛鳥のことに触れた文章を知らない。私の生れたところは、入海の穴の海が平野となつて穴の国と呼ばれ、記紀に書かれた品牟遲部をさす品治国である。品治国は大化の改新で品治郡となり、明治に芦田郡と合併して芦品

郡となったが、昭和の後期に福山市に合併してその名は消えた。私は品治国を惜しみ、ペンネームに取り入れた。新田次郎の真似をしたのである。品牟遲部とは、垂仁天皇の皇子品牟遲和氣命が出雲遠征の途中寄られた土地で、皇子の御名代である。これは古伝承であるが、私は穴国が飛鳥によく似た盆地であるため、御名代になったのだと想像した。倭健命の望郷の歌の「倭は国のまほろば たたなづく青垣 山隠れる 倭し美し」は品治国にも当てはまる。ランドサットによる日本列島の地形を眺めて、大和盆地に似た土地は少ない。穴国は文字通り穴で発展性がなかったが、飛鳥は奈良、京都と北方に開けていたので、都として発展し、近代に東京まで飛んだのも頷ける。杉本苑子さんは飛鳥を空白の舞台と呼んでいる。その舞台はしつかり残っている。飛鳥は俳句のルーツでもあると思った(品治六郎)——二〇〇四年「屋根」投稿文一。

④水のきれいな秦野には高志さんと訪れたことがある。駅前から市街地に水路を設けてあり、水の街を強調している。六月に入つて今回はもう少し足を伸ばして御殿場線に乗り南足柄市の山北駅で下車した。そこには酒匂さかわ川があるからだ。高志さんの先祖の地と云うので訪ねたのだったが、ほんと鮎を求めている吟行旅行であつた。酒匂川に行けば清流なので鮎はいるだろ

うと見当をつけていた。酒匂川に辿りつくまでに、ダム下の東電の発電所を過ぎ高架橋にさしかかった。橋の下を覗くと釣人が十人ほど釣竿を傾けていた。下には下りられそうにない。この先に洒水の滝があるというので、そちらに先に行くことにした。私達を追い抜いてウオーキングの会の人たちが滝に向う。幅は狭いが三百メートル級の直下形の滝の水量は多く、轟音に誘われて行けども落石のため立入り禁止で滝壺まで辿りつけない。神々しい姿の滝に一礼して退く。後で知ったのだが、文覚上人の修行の滝であり、つい最近まで滝修行が行われていたという。翌朝、鮎釣りをしようとして酒匂川の河川敷に下り、釣人に近づく。十二三人いて石ころの多い浅い川に皆膝まで浸かり釣っている。釣糸は流れに任せているようだが、微妙に動かしているようだった。次第に釣りの様子がわかってきた。皆団鮎を使っている。たまに釣れたらすぐにそれを団鮎にして釣るのだという。鵜舟のかなしさに通じると思った。六月一日に解禁したが今日は大雨の後なので漁は少ないらしい。河川敷に立っている私には鮎の姿は見るができない。水から上ってきた釣人に移動罐の中の鮎をみせてもらった。一〇センチ前後で小さく天然ものはこんなものだという。川の様子を見に来ていた地元の人の話では、釣って帰っても家族は誰も

食べないし、自分ひとりでは食べきれず古いものから捨てているという。何と勿体ないことかと思うと、その人と話すのが嫌になった。しかしまんざら作り話でもなさそうだと帰りに思った。前日の夕食に出た鮎は間違いない養殖ものだった。それにしても故意にうねりをつけられたお皿の鮎にはあはれを感じずにはいられない(光みち)。――二〇一五「萱」投稿文――

⑤今年の夏は猛暑続きのかつて経験したことのない暑さです。息子家族に誘われ館内で遊べる静岡県焼津グランドホテルに泊まってきました。駿河湾を一望でき遠く富士山が望める風光明媚なところです。夏休み中であり、子供づれの利用客も多くにぎわっておりました。ついて早々館内で「駿河湾で夏にとれる魚をさがすスタンプラリー」に挑戦しました。4か所のスタンプ(ヒラメ、エビ、カツオ、太刀魚)を押し、受付にもつていくとはなる🍷を書いてくれお菓子がもらえました。夏休み広場では輪投げ、お宝すくい、落書きせんべいなどのイベントがあり参加し、プレゼントをもらい孫は大喜びでした。ライブラリーエリア、ボードゲームエリア、サッカーゲーム、卓球、プール、お抹茶体験など楽しめます。ピアノの演奏を聴けたり、大人も、子供も満足のいくものでした。食事は朝夕とも

ビュツフェスタイルで新鮮な海の幸がとても美味しかったです（浅野正美）。

⑥いつも白金葎を送付して頂き誠に有難うございます。貴兄が芭蕉に関する記述を深く表現されておりますね。自分はあまり芭蕉に関心はありませんでしたが、読み続けますと、吸い込まれるように目が傾きました。特に羽黒3山についての、行動や、観察について色々参考になりました。これからも、楽しく続けて下さい。白金葎を愛讀されており、皆さまにも懐かしい故郷をお持ちの事と存じ上げます。光成さんの故郷にも、瀬戸内海を目にした美しい景色があるのでしょいか。自分の故郷であります唐津市には数多くの観光スポットがあり、いくつかを誌面に紹介したと思います。博多空港から田舎の家に帰るときには、玄界灘を右手に唐津までの電車旅となります。唐津に近づくと、必ず窓辺には「虹の松原」が目に見え、帰ってきたことかと知らしてくれます。懐かしい風景の一つであります。「虹の松原」は日本の松原3景に選ばれております。静岡県「三保の松原」・福井県の「氣比の松原」と多少は有名な観光スポットです。皆さん機会がありましたら一度訪ねられてはいかがでしょう。田舎の人たちは皆を心から「方言」で『よう帰ってきたね』と迎えてくれますよ。虹ノ松原の右手には、鏡山とい

う小高い所があります。ここから、小夜姫が玄界灘に飛び立ったと言う逸話があります。現実は何かなものかと思っているところです。この辺で観光自慢は終わりにします（山下寿幸）。

お便り広場

光成様いつもありがとうございます。7月号20部お送りします。八月は夏休みのことゆつくりと英気を養って下さいね。毎日ひたすら暑い暑いです。ご自愛ください（木戸敦子）。白金葎7月号をお送りくださり有り難うございました。誌友の仲間に入れていただき嬉しく思います。高志様の長文は私には難しいですが、度々拝読していくうちに関心を持ち、知らなかった知識を教えてください。高志様になりつづります。7月も暑さが厳しい日々でしたね。たくさんさんの俳句から、暑さに負けずお二人でお出かけなさっている様子がうかがえます。（中抜いて俳文広場・掲載）お体に気をつけて熱中症対策をしっかりとってお過ごしください（1. 朋子）。（来て見れば畑の西瓜食はれたり（みち）と隣のみちさんが朋子さんのハガキから句にしました。朋子さんそろそろ俳句というか五七五と言葉で描写、つまり写生することを始めてみませんか。畑のものはすべて季語ですから、それを見たままを書いて後で575音にまとめれば俳句になります。ハガキに書いてどんどん送って下されば、私が見て返します。メールを使えば返信が即座に出ますので便利です。誌友を卒業して俳友（俳句俳文両方OK）になつて生活を新しくしましょう。こういうことが負担になるのであれば

しばらくこのまま誌友を続けましょう。どちらでもOKです。高志。猛暑の中いかにお過ごしでしょうか。お見舞い申し上げます。先日は「白金葎」七月号を送り下さりありがとうございます。ございました。久しぶりのお手紙でつい長々としたためてしまいました。少々反省しております。句誌ゆくり読ませて頂きます。(中抜いて俳文広場へ掲載)どうぞ充分ご自愛下さいますように。令和七年八月八日廣本幸恵 光成高志様 追伸省略。(幸恵さん手紙受け取りました。内容がさらにいいです。風船葛の写生文、こう言うのを俳文とも呼んでいます。家の庭にも毎年生えてくるのでほとんど無視していましたが、幸恵さんの手紙を打ち込みながら三回確かめに見に出しました。大分以前にその種子が可愛らしいと句会の席に持って来て見せてくれた俳人もいました。今年は狂暑が予報されたので毎年のことながら緑の棚グリーンハウスのためのゴーヤを植えました。その横に自然に生えた風船葛が伸びています。風船葛は秋の季語になっています。昔作句したことがあります。忘れました。例句は沢山あります。作者それぞれの思いで作っているのどれがいいとか悪いとかは言えませんが、私は下の句が本意に沿っていると思います。「風の吹くまゝの風船葛かな」(飴山實)「実をつけて風船葛咲きのぼる」(同) 作者は静岡大学の教授で俳人でした。ともかくこの調子で俳文なりなんなりを書簡にしてお送り下されば、本誌に掲載していつまでも交誼が結ばれます。追伸・何回も見ているうちに「風船葛はち切れんばかり也」「風船葛針金の蔓握る」二句がとりあえずできました。高志。)たいへんな夏を過ごしています。40度とはどうなっているのかしら。月に住む人になるつもり。どうにか考えないと生きられなくなり

そう。地球は終りそうみたい、考えすぎ・でもたいへん生きるのが。お日様ごめんなさい。被曝80年で昔を思い出しています。あの頃の生活があったから今元気でおられると思います。身体に気をつけて下さい。かしこ(8.13 幸子)。(幸子姉さん7月号の手紙の後ろに小さい字で書いた箇所をもう一度お読みくださり、昔の事は過去、もうないものです。今現在のことを目をやって手紙に書いてみて下さい。食べものの味覚などは書きやすいのではないのでしょうか。俳句の季節を表す名前が多いですよ。今は秋です。秋茄子、秋鯖、無花果、蟬、芋、鱒、いんげん、オクラ、柿、南瓜、菊、衣被、茸、金柑、銀杏、栗、栗ご飯、さつまいも、秋刀魚、生薑、新蕎麦、新米、西瓜、酢橘、太刀魚、月見団子・・皆季語です。あげればきりがありません。梨、葡萄、マスカット、木天蓼、松茸、とにかく切りがありません。そういうものに気を使い目を向けて生きて行して下さい。高志。) 秋暑お見舞い申し上げます。よくもこれだけの暑さが長つゞきするものですね。庭に野の鳥用に置いた赤いバケツに満杯の水が一日で20ほど蒸発する熱気がおそろしいです。炎天寺へ行つたときのこと思い出してパンフでもあるかと探しましたが見当たらず、光成様も特別のアクセシデントがございましたの思い出しました。どう云う風に行つたのか人頼みだったので忘れました。竹ノ塚とか云うところに乗りもの何で行つたのでしたっけ。その関連と申してはおかしいのですが、私と同じく多様な事に興味をお持ちになるお二万様なので(もしかしてお持ちかも) 差し上げることといたしました(谷

中の墓地案内)。八月号白金霞が到着するのに行き交いになりそうですが、七月号の表紙もステキでした。たゞ拙句が出されているのに忸怩じたる思いではありませんが・。芭蕉の出羽三山の句、昔も今もずっと受け入れられる句とても好きです。高山れをなさん選は、私の好みではありません。若い頃力ナ文字入りの句も好みではありませんでした。今やそんなこと云ってたら俳句作者からほっぱり出されるでしょう。七月号 先生とみちさまのお句、(成り下るゴーヤ 家族となりし鈴虫) 私は食べない、飼育に失敗。病院の待合室に目高売る 人影を見れば目高の寄ってくる 不思議な光景(先生) 人影で寄ってくる(みちさま) 目高の気持ちいろいろ想像しました。もう目がちかくしてきました。突然のかしこです。こゝまで頑張つていらつしやる抗暑もうすこしガンバラして下さい。頂いたニンニク何と仏壇の上方に吊るしています。すごい魔除けです。白く乾いてブラ下り大の気に入ります。光成高志先生、みち様 R7 8/27 璃子(私の句まで書いていただきました。恐縮に存じます。竹ノ塚の炎天寺は若い住職が俳人だったので西新井大師を吟行して、炎天寺に移動し句会の席を貸してもらったお寺です。今年の原爆忌のような炎天の歩きから強冷房の黴臭い部屋に案内されて、句会の最中みちさんが急に倒れて救急車で病院に運び MRI を撮りそこではどうにもならないというので医者仲間がいる駿河台の日大病院まで隅田川沿いの高架道を救急車で走りました。柔道黒帯の医者が高乗してくれましたので車中雑談をしながら駿河台に向いました。

私は内心みちさんを連れまわしてこれは殺してしまつたかと冷や冷やしていました。が、表面は自分でも驚くほど冷静でした。以下略。芭蕉に倣い私の句は皆見たままの句です。自然は無限、それに少しでも触れて感動したものを五七五にまとめた句です。いつまで出かけられるか先の事は考えていません。最近はず語に出会うと何だか嬉しくなつちやうんです。高志。お父様お母様へ敬老の日なのでお菓子を送ります。どうぞ食べて下さい。京都のベルアメルというチョココレートのお店が10周年で新宿伊勢丹でポップアップストアがオープンしたので行つて来ました(9.13 晶子)。残暑につぐ残暑の候お伺い申し上げます。お二人とも御健吟のことと存じます。小生今月で95歳となり心身ともに老衰の極、歩行も不自由ですが何とか存えて居ります。駄句をひとつ。「クマに噛まれず転倒もせず秋涼し(陽二) クマどころか今年はセミをあまり聞きません。ではお元気で(9.16 陽二)。(陽一さんエッチングハガキ有り難うございます。お元氣と察しました。上の璃子さんは既に102歳になられお元氣に活動されておられます(高志)。

# 我孫子日記

	7/18	会
	7/25	句会
	7/29	五井歯科
	8/1	胃カメラ診療OK
	8/9	駅前ク(内科)
	8/15	向日葵園
	8/17	五井歯科
	8/21	放談会
	8/22	古谷野皮膚科
	8/23	五井歯科
	9/5	昼寝会
	9/10	伝統工芸展
	9/12	朝日デジタル版
	9/16	茨城自然博物館野外
	9/19	葡萄狩
	9/25	句会

\*首垂るゝものなし向日葵林立  
ひまわりはみんな東ひんがし向いてゐる

ひまはりの花道皆我に向く

アランドロンまがいの向日葵を買ふ

直立のひまわり園に迎えらる(みち)

八頭身ならず十頭身ひまはりは(〃)

手賀沼とひまはり畑隣り合ふ(〃)

ひまわり畑入口に売る夏野菜(〃)

\*2 つくつくや畳の部屋でシャバアーサナ  
屍体

南部風鈴金属音のこまやかに

\*3 透かし組花籃といふ涼新

新涼や竹工芸の亀甲紋(みち)

\*4 ペグマタイト火成岩梅の落葉を被りをり

シユリーレン梅の落葉を載せている

飛び過ぎて飛蝗はったは池に着水す(みち)

閨門橋よりとんぼの池を眺めをり(〃)

榛の木の浸かりし岸辺法師蟬(〃)

蛸螻つくつくぼうし閨門橋を惜しむかに

法師蟬宮沢賢治の石並ぶ

古東京湾の板に雪崩るゝ萩の花

山形の瑤瑤めう岩立つ虫の声(みち)

水引草の道大木は名札付け(〃)

リチウムペグマタイト取り巻く葛の蔓

梅落葉斑糲岩はんれいがんを囲みをり

\*5 この葡萄採り時来るベリーA

葡萄ハウスに試飲禁止の札立てゝ

葡萄狩籠の葡萄が重くなり

コスモスの青に囲まれ葡萄ハウス

坂がかりひっそり咲ける鳳仙花

サイパンの市長も来きたる葡萄園

スカレット新しき名の葡萄あり(みち)

曼殊沙華リーフデ水車入口に

オランダの国旗はためく秋の風

国旗掲げオランダ風車秋の雲(みち)

風車の周り水路のありて秋の水(〃)

編集後記

上の\*4の句にある瑤瑤めうやリチウムペグマタイト、斑糲岩はんれいがんは宮沢賢治の詩に出て来る岩である。みちさんが詩集を読んだことがあるというので、宮沢賢治全集ⅠとⅡを拾い読みした。故昭七さんの鑑賞文(十周年記念号)もあるが、そのⅠⅡの分量と中身に驚愕した。二十歳から柳田國男と共に興味があつたのだが、賢治を打っちゃっていた。今後の課題である。

白金霞9月号(通巻167号)誌代一部千五百円(年会費一万五千円)郵便振込口座一〇五二〇一四二二三六一名義シロガネヨシ令和七年9月21日発行編集発行人光成高志発行所〒270-1119我孫子市南新木2-14-17光成方 投句先・メール又はライン印刷製本・喜怒哀楽書房〒950-0801新潟市東区津島屋七二九。表紙の題字は嘉悦羊三&14の白金霞&門田祐一君のご祖父・尊父ご自身三人展作品&伝統工芸展作品&璃子句集「穴まどひ」からの選句。